



関東学生新聞連盟

合同紙面

この企画は、関東学生新聞連盟に所属する7大学新聞が合同でひとつの紙面を作成するということである。今回のテーマ「職業としての教員」では、各大学に勤務する教員に焦点を当て、雇用の現状や、教育・研究・職務の両立、また企業に求められるスキルなどについて、各大学が加勢し、活性化するように尽力を努める。

関東学生新聞連盟は2008年に関東地方の学生新聞団体の相互扶助を目的として発足した。2016年10月現在、青山学院大学、慶応義塾大学、上智大学、筑波大学、東京理科大学、一橋大学、法政大学、7大学が加盟し、活

上智大学

小林幸夫教授

職業について、文学や文学者を通して知ること

は少なくない。かの文豪、夏目漱石は「道楽と職業」という題目で講演をし、自身の職業観を語った。文学と大学教授という職業について、上智大学文学部国文学科の小林幸夫教授に話を聞いた。

小林教授は、上智大学で修士の学位を修得。同大学博士課程在籍中に作新学院女子短期大学の講師が決まり、その後助教に。現在

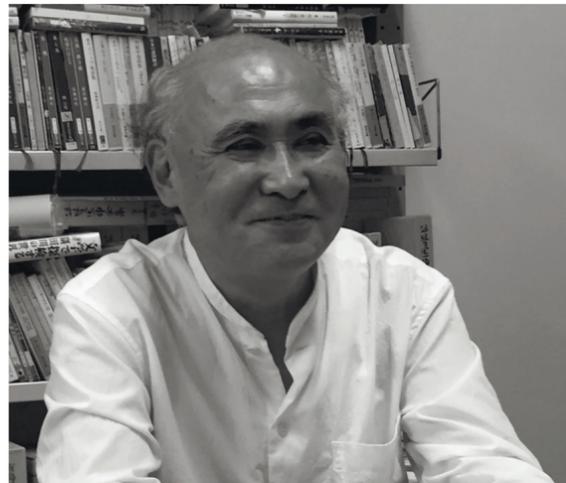
は本学の国文学科教授として文学研究科委員長も務める。専門は森鷗外や志賀直哉を中心に日本の近代文学を、加えて近代短歌について研究をしている。

自身は、上智大学で博士課程在籍中に作新学院女子短期大学の講師が決まり、その後助教に。現在

ただでは食っていけないから仕方なく教えている」と学生に言うほど。しかし、大学教授を続ける中で、自分はこの職業に向いていると感じた

夢で、できる限り全く労働せずに生きたいと語った。例として、作家、武者小路実篤が作った「新しき村」を挙げた。労働時間は最低限に抑え、その他の時間を陶芸など芸術的な活動に使い、自分の精神性を高めるような

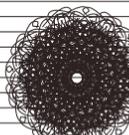
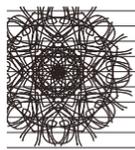
生き方を実践しているからだ。「好きなことを仕事にして生活するのが一番だが、それを掴みとれる人は一握りだ。仕事はほとんどに、残りの時間を趣味に費やせるような生活を掴む努力も必要ではないか」とし、「仕事そのものが好きな人はもちろん、仕事だけをして良いけどね」と付け加えた。



▲上智大学・小林幸夫教授

筑波大学

白木仁教授



白木仁教授(体育系)は大学教員として1、2年生対象の体育の必修科目で、ゴルフの指導を行う一方、「アスレチックトレーナー」として、五輪選手などの世界レベルの選手の体調管理を行う。

筑波大大学院で解剖学を学び、卒業後は2年間、総合スポーツ用品の「アシックス」で同社の選手のトレーナーを勤めた。

だが、「仕事が少なく、やりがいを感じなかった」。そんな中、筑波大の体育センター技官(当時)の募集を知り、「再び大学でトレーナーの研究をしたい」と応募し、1985年より技官に。その後、名城大学講師を経て91年に筑波大の講師として採用された。

筑波大では選手の体脂肪率やMRI画像などの医学的データを精密に管理。それに合わせた指導が高く評価され、元プロ野球選手の工藤公康選手(現・ソフトバンクホークス監督)や世界レベルのシンクロナイズスイミングの選手などのトレーナーになった。

以降、教員とトレーナーを両立してきた。「筑波大には、コーチング学や心理学など、トレーナーの



▲筑波大学・白木仁教授

指導方法には信念がある。「ネットで簡単に情報を入手できる現代だからこそ、学生に面と向かい指導したい」と話し、ゴルフの授業では、学生との対話を重視。対話を通して学生の身体の変化を見極め、一人ひとりに合った指導を行う。

教員のやりがいを感じる時は、学生に「分かりやすい」と言われるとき。「限られた授業時間の中で、学生にできる限りの指導をしたい」と話した。

昨年度から筑波大に務める落合陽一助教(図情メ系)はデジタル技術を用いた作品制作で「現代の魔法使い」と呼ばれ、最近ではテレビやラジオにも多数出演している。多方面での活躍中の落合陽一は、教員としての一面を取材した。

落合助教の今年度の授業は7つで、クラス担任も務める。新入生を対象に、春学期にクラス担任がレポート作成の基本などを教える「フレッシュマンセミナー」では学生にパワーポイントなどを用いた自己紹介をさせた。

授業方法も独特だ。1、2年次対象の「コンテンツ応用論」では、授業への質問や感想を学生がツイッターで授業名のハッシュタグをつけてツイート。落合助教がそれを見て授業に反映させる。また学生のレポートはネット上で公開。1週間の閲覧数が9000件を越える場合もある。

自身が主催する「デジタルネイチャー研究室」には現在約20人が所属し、うち13人は自身も卒業生である。ARE(先導的研究者体験プログラム)の学生。「学生の論文が学会などの選考を通った時が一番うれしい」と話す。「今の日本で勝つためには、何事にも時間をかける必要がある。社会で消耗しない学生を育てたい」。

一方で、事務仕事も多い。学部ごとに教員が組織する広報委員会に所属し、大規模な学術大会の準備などを行うほか、週1、2回の会議や大学入試に関わる仕事も。「特に大学入試の関連業務は、学会の発表原稿の締め切りと重なることも多く、徹夜が続く」。

最近ではメディア露出も増え、常に仕事に追われる睡眠時間は平均4時間ほどで、研究室には着替えと簡易ベッドを常備する。「今一番欲しいものはシャワー室」と話す。「筑波大は自分の研究ができる数少ない環境だ」という。

今後の大学と教員については「大学はベンチャー企業の前段階のスタートアップのようなもの」と持論を展開。「今の大学は『こうあるべき』という制約にとらわれすぎだ」と指摘した。

教員が授業や研究以外の事務に忙殺される現状についても「専攻の基礎分野の授業は非常勤講師に委任するなど、教員が専門的な教育・研究に専念できるようにするべき」と指摘。「予算が年々減少する中、筑波大はもっと『経営を回す』ことを考えていくべきでは」と述べた。

落合陽一は1987年生まれ。2007年に筑波大に入学後、11年に東京理科大学に進む。飛び級で15年に卒業し、筑波大の図書館情報メディア系の助教に就任した。人間と自然、デジタルを融合した「デジタルネイチャー」の世界観を提唱し、その研究と作品制作で世界的に高い評価を得ている。



▲筑波大学・落合陽一教授